

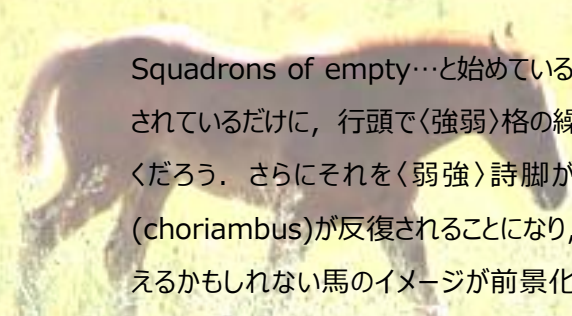
よみがえることば—4
馬はなぜ首を振るのか—答の出ない問い

東京大学教授 高橋和久

かつて競走馬として一世を風靡した馬が 2 頭、今は引退して草地でのんびり草を食んでいる、ように見える。耳に纏わりつく蠅を払おうと馬が首を振るのはいつものこと、に違いない。おそらくは、しかし、過去の栄光を偲ぶのは人の常だけでなく、馬にも当てはまることなのだろうか。Do memories plague their ears like flies? / They shake their heads. などという一節を目にすると、ふとそんな気がしてくる。出典は 20 世紀後半のイギリスを代表する詩人のひとり Philip Larkin(1922-1985) の “At Grass”(1950)。何しろこのタイトルがすでに馬と人とを二重写しにしているらしい。「草を食べて」と「職を離れて／引退して」の両方を意味するだろうから。しかし何より興味深いのは、首を振る馬の仕草の意味が多義的なまま宙吊りになっていること。それは「悩ませているか」という問いに対して「いいえ」と答える否定の身振りのようでもあり、そんな問いかけとは無関係に、蠅を追っているだけのようでもある。考えてみれば、首を振っているという馬の動きを前にして、詩人はそこから、人間的と言え言える問いを発しているのではないだろうか。それならば今度は逆に、そんな人間的意味づけに対する拒否の姿勢——「馬鹿なことを訊くんじゃないよ」——をここに読み取ることも不可能ではないかもしれない。ただ、こうした読解の姿勢そのものが、何かにつけて解釈をしないではいられない人間の所産であるのが厄介なところなのだ、と慌てて付言しなくてはならないが。

然るべき前置きもなしに拙稿をこのように始めたのは、実は *UNICORN English Communication 2* の LESSON 12 がこの詩をめぐる擬似授業の形式になっているからである。したがって、臆面もない自己宣伝になるが、議論の重複を避けるためにも、この駄文はその課と併せて読んで頂きたい、とお願いしてしまおう。その課の最後に、この詩について「語るべきことはもっとたくさんある」と記されており、これはその不足を埋める補遺、もしくは蛇足の役割を少しだけ果たすにすぎないからである。

この詩で静謐を湛えた現在と活気に満ちた過去が対比されていることは一読して明らかだが、鮮やかな過去を蘇らせるために、詩人は第 3 スタanzas の冒頭 3 行を Silks at the start... / Numbers and parasols... /



Squadrons of empty…と始めている。全体がほぼ弱強 4 歩格で構成されているだけに、行頭で〈強弱〉格の繰り返されているのが否応なく目につくだろう。さらにそれを〈弱強〉詩脚が受けるために、〈強弱弱強〉格 (choriambus) が反復されることになり、激しく疾駆する猛々しいとさえ言えるかもしれない馬のイメージが前景化されている。そこに、Squadron (戦隊) を意識しつつ、かつて武勲で名を挙げた将軍たちの姿を重ねる——そう読めば、この詩は大英帝国の栄光への郷愁を湛えていることになる——かどうかはともかく、第 4 スタンザの最終行 Almanacked, their names live; they に至ると、ここは期待される 8 音節目が欠けている (catalexis) ために、年鑑のなかに生き残る「名前」と対比される「かれら」の死がはっきり予感されるだろう。句^{くまが}跨り (enjambment) の効果は強烈である。実際に死が明示的に語られているわけではないが、最終スタンザに見られる home は競馬のゴールでもあり、厩・厩舎でもあり、もしかすると最終的な憩いの場としての死をも暗示するかもしれない。

実は教科書本文は、基本的に上記のような読解に従っている。そして以下が補遺の補遺たる所以——本体を補って完全なものへと近づけると同時に本体の不完全性を露わにするといういわゆる〈代補〉性を持つ——だが、詩の最後の 2 行 Only the groom, and the groom's boy, / With bridles in the evening come. は果たしてどれくらい死を暗示しているだろうか。唐突ながらここで『マタイ伝』25 章 6 節を参照してみる——And at midnight there was a cry made, Behold, the bridegroom cometh; go ye out to meet him. これは、遅れてやって来た新郎への備えを怠った愚かな乙女たちと備えを忘れなかった賢い乙女たちを対比し、婚姻の席に入った後者と違って、その門を閉ざされた前者に「目を覚ませ、汝等は人の子の来るその日、その時を知らず」と主が語るという寓話の一節だが、しばしばキリストの再臨に言及したものと解されている。両者を並べてみると、詩中の groom と bridle の背後に『マタイ伝』の bridegroom が浮かび上がってはこないだろうか。さらに bridle はどこかで bridal と響きあうような気がしないでもない。それならば、この詩の最後は死だけではなく、そこからの再生をも暗示していることになる。

ことばは常によみがえる。しかも常に異なった相貌の下によみがえるものらしい。わたしたちの解釈の網をその度にくぐり抜ける意味作用をもって。